

マケドニア墓埋葬主体部に関する考察

ー正面柱式の意味についてー

松尾 登史子

The Meaning of Orders on the Façade of Macedonian Tombs

Toshiko MATSUO

古代マケドニアの考古学調査は、近年になって、多くの都市（ポリス）・集落遺跡の傍らに「死の都市（ネクロポリス）」の様相を鮮明化しつつある。その埋葬形態は南ギリシアと比しても極めて特徴的であり、特にマケドニア独特の室形墓「マケドニア墓」の存在が注目されている。同墓埋葬主体部の正面は、ドリス式及びイオニア式を含む5柱式の何れかを擁した神殿風形態で飾られている。この柱式採用には意味があると推察されるが、実態はよくわかっていない。本研究ではその分布調査を遂行し、綿密な考察を行なった。その結果、ドリス式はマケドニア民族の象徴として王族以下広く使用され、イオニア式は上部階層の一部において、恐らく外来的な影響の下で使用されていた、という結論に達した。

キーワード：古代マケドニア、葬制、ネクロポリス、マケドニア墓、柱式

Recent archaeological research on ancient Macedonia has shed light on some aspects of necropolises around many cities and settlement sites. We found that the burial attitudes of ancient Macedonians are completely without parallel anywhere else in Southern Greece. Particularly, the Macedonian chamber tombs have drawn public notice. The façades of this type of tomb are adorned with the temple-like style of Greek architecture, comprised of five orders; Doric, Ionic, etc. Research on the distribution of tombs was undertaken in order to determine the selection and usage of order type. Results indicate that the Doric order was used as the symbol of the Macedonian people, however, the Ionic order, probably due to foreign influence, was used by the wealthy upper class of Macedonian society.

Key-words: Ancient Macedonia, funeral systems, necropolis, Macedonian tombs, orders

I. 序

古代マケドニア王国（Archaio Makedoniko Vasileio）は、ヘレニズム文化を東方に伝えたアレクサンドロス大王（Alexandros III: 在位前 336-323 年）の故国として知られる。騎馬遊牧民として出発し、古典期つまり前5世紀には文化先進地域の南ギリシアにとり夷狄にすぎなかった古代マケドニア人らが、前4世紀には衰退した南ギリシアの都市国家を陵駕し東地中海を束ね、一時的ではあったが中東を跨ぐ空前の大帝国をつくり上げた。このように世界史に大きな影響を与えた古代マケドニア人について、古文獻が殆ど残っていない故にその実態はなかなか明らかにならなかった。豊かな古文獻に彩られた南ギリシアとは対照的である。

そのマケドニア¹⁾の地において考古学的調査への道が拓かれてきたのは、20世紀も後半になってからである（松尾 2008: 178-179）。20世紀初頭、バルカンを巻き込んだ血

みどろの戦いの末にギリシア本土に併合されてから、2度の大戦を経てその傷も癒えぬままに突入した内戦は泥沼化し、1949年に至り漸く終結に至った。戦後の後始末は長引いたが、次第に国土は復興の途を辿り、市民生活は向上し始める。このような中、徐々にギリシア人自身の手による発掘調査が多く都市（ポリス）および集落遺跡の様相を明らかにし、またその傍らで「死の都市」というべきネクロポリスの様相が鮮明化し始めた（図1）。特に1970年代後半におけるヴェルギナ（Vergina）の古代マケドニア王族の墓の発見以来、古代マケドニア独特の室形墓である「マケドニア墓（Makedonikoi taphoi）」の存在が注目されるようになってきた。

筆者は、古代マケドニアにおける王族を含む為政者階層が被葬者である、このマケドニア墓の分析を行なうことにより、古代マケドニア社会上部階層の構造解明が期待できると考えている。

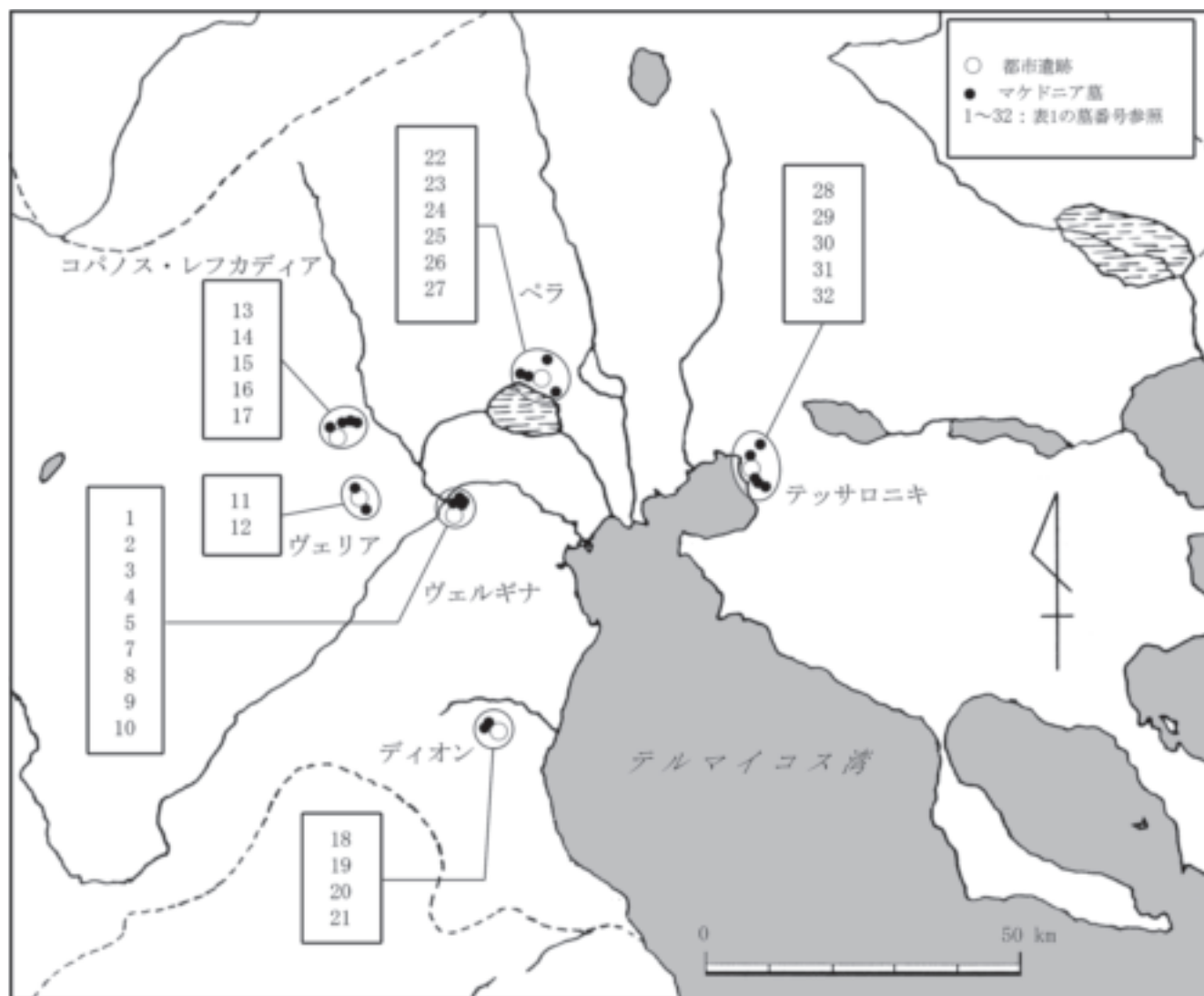


図1 古代マケドニアの主要都市遺跡と近郊マケドニア墓群の分布図

本稿においては、そのマケドニア墓の特徴の一つである神殿風正面の形態に注目し、その柱式の採用に意味があるという仮定の下、分析を行なった。

II. 本論の背景

本論の背景として、分析対象であるマケドニア墓について特徴等を示して、それをめぐる諸問題について整理し、問題設定に至った経緯を述べたい。

A. 「マケドニア墓」とは

「マケドニア墓」とは、埋葬主体部とそれを覆う墳丘よりなる、古代マケドニア独特の墓である(図2-a)。単室あるいは複室構造を持ち、蒲葺形天井(vault)²⁾を頂き、正面形態はギリシア神殿風であり、墓道を擁する。おもに古代マケドニア王国の本土において、王国の絶頂期から衰退期にかけて盛行した故に、「マケドニア墓」と呼ばれる。

同墓は埋葬主体部の構造から室墓の一種であるといえ、建築資材を組んで建設された「建造式室形墓(ktistoi thalamwtoi taphoi)」である。マケドニア地方には、これ以外の主要な室墓として、軟質の岩壁を削って室状の横穴をつくった「岩削式室形墓(laxeftoi thalamwtoi taphoi)」がある³⁾。

D. パンデルマリス(Pantermalis)によればマケドニア墓とは以下の3つの特徴を持つ(Pantermalis 1985)。

1) 蒲葺形天井を擁する地下墓室

埋葬主体部は地表面下に位置し、その上を墳丘が覆う(図2-a)。墓室は単室あるいは複室構造で、蒲葺形天井を頂く。複室構造の場合は、前室が平天井の場合がある。建築材はマケドニア地方において豊富な石灰岩が用いられ、当時貴重であった大理石は、扉や扉枠、敷居などに部分的に使用された。外観上大理石に似せるためか石灰岩上から

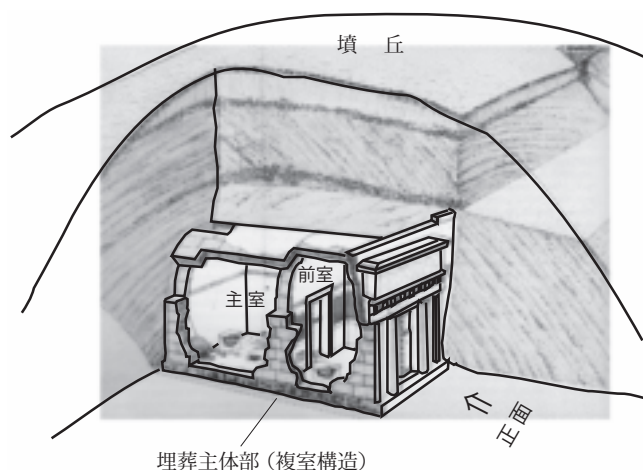


図 2-a マケドニア墓 (番号 1: A-T2) 模式図
(Touratsoglou 1997: pl. 284 より一部改変して筆者作成)

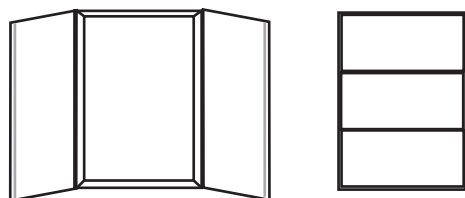


図 2-b マケドニア墓埋葬主体部の開口部閉塞方法模式図
(左: 扉式、右: 積み石式)

漆喰が塗られた例も多い。墓室の内部は、都市生活の延長と考えられるような内装が設えてある。寝台あるいはサルコファゴス (Sarkophagoi)、玉座、台座などの据付家具があり、壁面にはしばしば色鮮やかな装飾画が施されている。

マケドニア墓の擁する蒲葺形天井は、ギリシアにおけるアーチ形建築類の最古の例であり、マケドニア墓を他の墓建築物と分かつ特徴の一つである。

2) 神殿風正面

埋葬主体部の正面は神殿風であり、殆どがドリス式 (Doric order) あるいはイオニア式 (Ionic order) であり、コリントス式 (Corinthian order) やどの柱式にも属さないもの、無装飾のものもみられる (図 3-a ~ d)。破風や柱間には叙述的な壁画が描かれていることもあり、文様風の絵装飾が施されている場合もある。正面中央には入り口として観音開きの扉があり、外側から方形石が積み上げられて閉塞されていることもある (図 2-b)。複室構造の場合には、前室から主室へ入るための観音開きの扉が設置されている。

この神殿風正面をもつ記念碑的墓建造物という形態は南ギリシアには見られず、南ギリシアに対するマケドニア独自の特徴の一つであるといえる。

3) 埋葬主体部を覆う墳丘

埋葬主体部は元来墳丘で覆われていたが、多くは近現代の耕作などで削平されて失われている。直径 10 ~ 100m、高さ 1 ~ 20m の円墳形である⁴⁾。

マケドニア墓は前 4 世紀第 3 四半期から前 2 世紀半ばまでマケドニア地方を中心に盛行した。マケドニア本土以外では、エペイロス (Epeiros) やテッサリア (Thessalia)、トラキア (Thrace)、エウボイア (Euboea) など、古代マケドニア王国の勢力が及んだギリシア北部地域に分布する (Sismanidis 1985; Mastrapas 1994) 一方、小アジアや南ギリシアにも点在する (Ginouves 1993)。1993 年の時点で総計 80 基余りが確認されている (Ginouves 1993; Miller 1993)。うち、マケドニア本土における出土数は 60 基以上にのぼる。現在も各地で発掘調査が続いているため、数は年々増加している。

B. マケドニア墓をめぐる諸問題

マケドニア墓が初めて発見されたのは 19 世紀のオスマン・トルコ支配時代に遡る。当時、軍事目的を以てマケドニアに入った英仏軍人による踏査が行われ、20 世紀に入っても戦塵の中にも拘らず少しずつその出土数を増していった。内戦後、ギリシア人による考古学調査も軌道に乗り、その調査・研究が大きな画期を迎えたのは、1976 ~ 1980 年に行われたヴェルギナにおける大墳丘 (Megali Toumba) の発掘調査によってであった。フィリッポス II 世 (Philippos II: 在位前 359-336 年) のものと比定される未盗掘のマケドニア墓が発見され (1977 年)⁵⁾、マケドニア墓への関心は飛躍的に高まり、マケドニア地方各地の古代墓の調査・研究は増加の一途を辿った。

既述の 3 つの特徴を備えたものとして定義されたマケドニア墓は、現在に至るまでに幾つかの集成が行われているが⁶⁾、これらの集成作業を軸に、マケドニア墓とその関連分野について様々な議論が行われてきた。その主なテーマは、墓自体に関わる直接的なものとして、1) 編年、2) 起源、3) 関連墓 (他の地域との関連)、が挙げられ、これらから派生する間接的なものとして、4) 都市や被葬者の同定、が挙げられる。

以下に、本稿の目的に関連する 2) に焦点を当てつつその概略を述べる。

1) 編年

マケドニア墓の編年は、主に建築的観点から様々な試みられてきた。特にヴェルギナの王墓発見以前のものは殆どの副葬品が盗掘を受けており、研究者は建築物のみを対象とした編年を試みていたが (Andronikos 1987b: 1)、いずれも完成していない⁷⁾。

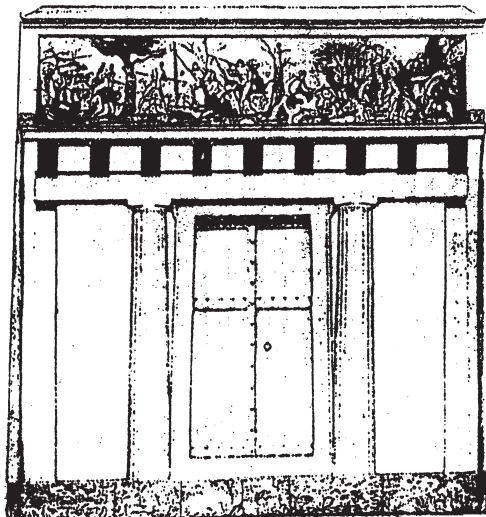


図 3-a $S = \frac{1}{100}$



図 3-d $S = \frac{1}{100}$

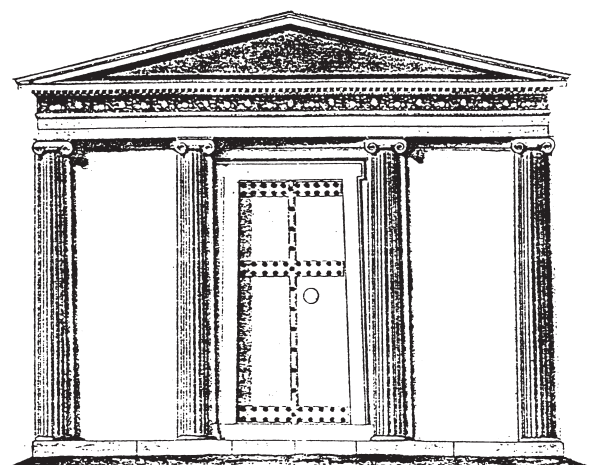


図 3-b $S = \frac{1}{100}$

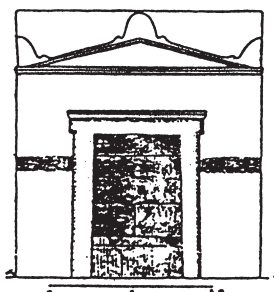


図 3-c $S = \frac{1}{100}$



- 図 3-a マケドニア墓 (番号 1; A-T2) ドリス式正面図
(Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: pl. 87 より転載)
- 図 3-b マケドニア墓 (番号 4; A-R) イオニア式正面図
(Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: pl. 60 より転載)
- 図 3-c マケドニア墓 (番号 19; D-T2) 自由式正面図
(Makaronas 1955: pl. 2 より転載)
- 図 3-d マケドニア墓 (番号 15; KL-J) ドリス・イオニア併用式正面図
(Müller-Wiener 1995: pl. 107 より転載)
- 図 3-e ギリシア神殿建築のドリス式及びイオニア式模式図
(Biers 1996: pls. 6.2, 6.3 より転載)

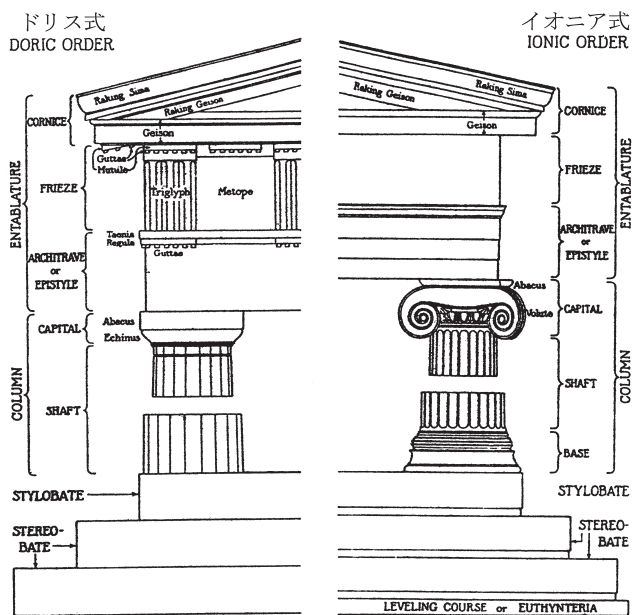


図 3-e

したがって、このような状況にあるマケドニア墓の年代は、副葬品として出土した個々の遺物により決定されてきた。指標となる遺物として頻繁に使用されているのは古銭や陶器であるが、正確な年代決定のためには様々な問題が存在する⁸⁾。

2) 起源

マケドニア墓の起源について、主に、その建築物の各要素に関わる問題と、墓葬形態自体に関わる問題とに分けられる。

前者に関しては、蒲葺形屋根および正面形態の系譜が論じられ、これらの建築技術について外来説と自生説、折衷説に分かれて論戦が交わされてきた。この際に焦点となったのが、蒲葺形屋根が前4世紀後半に唐突にギリシアの中でマケドニアの地において出現したことから発生した問題である。アーチ形や蒲葺形を擁した建築物は中東やエジプトにおいて古くから存在したが、ギリシアにおいては前4世紀末に初めて出現する。そして、ヴェルギナの王墓をはじめとするマケドニア墓の一群がその最古の例となるのである。したがって、マケドニア墓の発見は即ギリシアにおけるアーチ形および蒲葺形建築の起源に関する議論に結び付けられ、論が展開された。当初は、古くからの研究者がアーチ形を擁した建築物は前5世紀から知られていたとする伝統的な説に拠っていたが、これらの年代判定が改められた後は、問題の焦点が移り、アーチ形関連の建築技術はギリシアの外から完成された形で取り入れられたものか、あるいはギリシア内で発明されたものか、という議論に転じた⁹⁾。

一方、蒲葺形屋根に関連して、正面形態についても独自に外来説と自生説が論争を展開してきた。ドリス式やイオニア式などの正面様式に関しては、南ギリシアからの影響であることは確実といえるが (Tomlinson 1987: 305)、アンドロニコスはマケドニア墓にはいわゆるギリシア神殿風の正面形態とは異なった自由な形態がみられるとして自由立形柱廊 (free-standing portico) と名づけ、自生説の立場をとった (Andronikos 1987b; Miller 1993: 101)。これに対し、ミラーはマケドニア墓の最終形態は独自のものといえるが、少なくとも初期の正面形態は中東の影響があるのではないかとしている (Miller 1993)。実際、マケドニア墓にみられる、大規模な記念碑的墓建造物と神殿風正面形態の組み合わせの概念に関しては、マケドニアの伝統でも南ギリシアからの影響でもないと考えられ、トムリンソンは、前4世紀の小アジアからの影響について、具体的にはハリカルナッソス (Halicarnassus) の専制君主の記念碑的墓建造物マウソレウム (Mausoleum) との関連を考察している (Tomlinson 1987: 307)。

後者、つまりマケドニア墓の墓葬形態自体の起源についての議論は活発ではないが、一定の説は展開されている。トムリンソンは、マケドニアの地で鉄器時代初期から現われる円墳に覆われた「方形土壙墓 (Lakkoeideis taphoi)」¹⁰⁾に系譜が辿れるとしている (Tomlinson 1987: 306)。マケドニア墓の起源について、その直接的系譜に関する仮説を明確に提示しているのは、アンドロニコス及び N. G. L. ハモンド (Hammond) であり、「箱形墓 (Kivotioschimoi taphoi)」¹¹⁾から発展する経過を提示している (Andronikos 1987b; Hammond 1991)。これらについても、まだ明瞭な変遷過程として示されていず、結論は出ていない。

3) 関連墓 (他の地域との関連)

マケドニア墓の様々な要素においてみられる他地域からの影響について、地理的に、南ギリシア的、バルカン的、小アジア的、の3つの影響が考えられてきた。歴史的観点から考えれば、南ギリシア、特にアッティカとの関連、またペルシア戦争時のペルシアからの影響と、ペルシアを通じて小アジアから受けたイオニア的影響が存在する。既述のように、建築的には蒲葺形天井や神殿風正面形態の導入、風習的には墓室内の寝台上における仰臥状態の酒宴を模した埋葬¹²⁾、などについて、他地域からの影響が論じられてきた。近隣地域の例としては、トラキア (Thrace) やイリュリア (Illyria) の室形墓との関連が色濃く見られ、密接な繋がりが見受けられる。

4) 都市や被葬者の同定

ヴェルギナの王墓の発見に関連して、その被葬者についての議論¹³⁾、更にはヴェルギナが旧王都アイガイであったかどうかの議論¹⁴⁾も行われ、現在も論争が継続中である。

C. 問題の所在

1970年代も後半になって本格化したマケドニア葬制研究であったが、上述のようにこれらの研究は専ら建築史や美術史、古典研究的な観点から行われてきた。つまりこれらの先行研究は、ヨーロッパ古典考古学の伝統的研究方法によるものであり、文献史料が十分にある歴史時代を対象とし、高度に文明化した歴史社会内部における諸事の研究に対しては有効である。しかしながら、対象とする古代マケドニア社会は、南ギリシアのポリス社会と併存し又十分な文化的影響を享受しているとはいえ、文字資料を殆ど残さなかった。したがって、その解明を古典考古学的方法のみで追究するには限界がある。つまり、古代マケドニア社会が総合的に解明され得るためには、従来の古典考古学的方法のみならず、先史考古学的方法が用いられる必要があり、両者が互いに補完し合って包括的な研究を行なう必

要がある。したがって筆者は、目下、先史考古学的手法を用いてマケドニア墓を含めた墓葬形態の分類・編年を行なって墓葬の変遷を明らかにし、古代社会構造解明を進めている。

この研究過程において第一に明らかにすべきは、古代マケドニア社会の骨格をなす上部階層の実態であり、彼らの埋葬形態とみられるマケドニア墓の正面形態に現われた柱式の選択と採用には大きな意味があると推測される。また古典考古学的方法に拠った先行研究の結果をも効果的に活用でき、当地の学史にも貢献できると考える。したがって、本稿では、マケドニア墓の正面形態の柱式の選択・採用について、分布調査を行なうことでその傾向を示し、その意味を考察する。

Ⅲ. 分析

既述のように本稿においては、マケドニア墓の正面形態に幾つかの柱式がみられることに注目し、その選択・採用の意味を考察する。まず墓埋葬主体部を対象とした分析を行ない、正面柱式の空間的、階層的な分布をみる¹⁵⁾。次にマケドニアの古代都市遺跡における柱式の分析を行ない、それを前者の結果と比較して検討する。

なお、本分析では、墓構造、及び、各都市遺跡に出土した建築遺構の一部分である柱頭のみを分析対象とする¹⁶⁾。また、データ収集は全て報告書に基づく。現存のマケドニア墓の多くが非公開であり、また調査報告書のみを残すものも少なくない状態であり、実見に困難が伴うためである。

A. 埋葬主体部正面柱式の分布

中央マケドニアに分布する計32基のマケドニア墓(表1a, 1b)の正面形態には、ドリス柱式(Δ)、イオニア柱式(I)、ドリス・イオニア併用柱式(Δ/I)、コリントス柱式(K)、自由柱式(E)の5柱式がみられる。この正面形態の分布傾向をみるために、1) 地域、2) 構造、3) 総面積(埋葬主体部内部)、4) 閉塞方法、について相関をみた¹⁷⁾。

以下に各々の分析項目とその変異について述べる。

1) 地域

各墓は都市遺跡を中心とした群に属する(図1)。ヴェルギナ(Aと略する。以下も同様)、ヴェリア(Veria: V)、コパノス・レフカディア(Kopanos - Lefkadia: KL)、ペラ(Pella: P)、ディオーン(Dion: D)、テッサロニキ(Thessalonike: Th)の地域群がある。これらの都市は、マケドニア王国の存続時期である古拙期、古典期、ヘレニズム期に繁栄し、中にはローマ期以降も存続したものもある。まず、騎馬遊牧民から身を起こしたマケドニア人が定住後初めておいた

王都が現在のヴェルギナに位置するアイガイであり、更に前4世紀初頭に遷都した先が新しい計画都市ペラであった。また、現在のコパノス・レフカディアの近郊に発掘されている都市遺跡は古文獻にもその名がある古都市ミエザであり、ディオーンは古くから王国の祭祀を司った宗教都市であった。またテッサロニキは、テルマイコス湾に隣接した港湾都市として前315年に建設され、ローマ期、ビザンツ期、オスマン期を経て現在まで連綿と都市の機能を保ち続けている。

ここでは、王国が初めて築いた王都アイガイの都市遺跡とされるヴェルギナ(A)を起点として同遺跡からの直線距離を測り、近→遠の順に置く(図1)¹⁸⁾。

2) 構造

各墓の埋葬主体部は、単室、複室のいずれかの構造を持つ。

3) 総面積

墓埋葬主体部の規模は大小様々であり(最小値3.77m²、最大値41.55m²)、内部の総面積の値は漸次的に切れ目無く分散している。この総面積と外郭の形(幅×奥行)の関係をみれば、正面から見て幅が狭く奥行があるものはより面積が広い傾向がある。全体的に大きく2群に分けられるようにも捉えられる(図4: ア群、イ群)。

4) 閉塞方法

埋葬主体部の入り口の閉塞方法について、扉閉塞、積み石閉塞の2つがみられる(図2-b)。扉は主に大理石製であり、2枚仕立ての観音開きである。稀に木製扉もみられる。また積み石閉塞は、主に石灰岩からなる3~6個の立方体ブロックを横に積み上げた形で、多くが扉の外側からの二重閉塞の形を採っている。この場合、扉は殆どが木製であり、朽ち果てた扉の一部が残存している。したがって、積み石のみ遺存していても、木製扉が設置してあった可能性もある。

閉塞されるべき箇所は、埋葬主体部正面の開口部、および、主室と前室との障壁の開口部の2つである(図2-a)。まず、墓の構造を問わず、墓埋葬主体部の正面についての閉塞方法を見た場合、積み石閉塞(a)、木扉+積み石閉塞(b)、扉+積み石閉塞(c)、の3つが存在する¹⁹⁾。経済性などを考えれば、前者ほど経済的であり省力化傾向にある。一方、複室構造の場合、障壁の開口部は、積み石閉塞、木扉、扉、の3通りがあり、正面開口部と組み合わせれば(正面開口部・障壁開口部の順)、積み石閉塞・積み石閉塞(a1)、積み石閉塞・木扉(a2)、積み石閉塞・扉(a3)、[木扉+積み石閉塞]・扉(b1)、扉・扉(c1)、[扉+積み石閉塞]・

表 1-a マケドニア墓基礎データ表

番号	墓名称	略称	地域	埋葬主体部外郭		埋主部形状 幅 / 奥行	墓内法						柱式	閉塞法		報告書記載造営時期 すべて紀元前	略称	番号	
				幅 (m)	奥行 (m)		前室		主室		面積 (m ²)	奥行 (m)		面積 (m ²)	入り口				前→主
							幅 (m)	奥行 (m)	幅 (m)	奥行 (m)									
1	Great Tumulus: Tomb II (Philip's Tomb)	A-T2	A	5.56	9.50	縦	4.46	3.36	14.99	4.46	4.46	19.89	Δ	扉	扉	350～325年	A-T2	1	
2	Great Tumulus: Tomb III (Prince's Tomb)	A-T3	A	5.08	6.35	縦	4.03	1.75	7.05	4.03	3.00	12.09	Δ	扉	扉	310年	A-T3	2	
3	Great Tumulus: Tomb IV	A-T4	A	5.00	5.50	縦	*	*	*	3.50	4.00	14.00	*	Δ	*	300～250年	A-T4	3	
4	Rhomaïos Tomb	A-R	A	4.60	8.50	縦	4.56	2.50	11.40	4.56	4.56	20.79	I	扉	扉	300～250年	A-R	4	
5	Eurydice's Tomb	A-E	A	7.90	10.65	縦	4.48	2.50	11.20	4.48	5.51	24.68	*	*	扉	344年	A-E	5	
6	Tomb at Town Hall	A-Hall	A	5.00	10.00	縦	3.85	3.55	13.67	3.85	4.30	16.56	I	積	扉	4世紀末	A-Hall	6	
7	Heuzey Tomb	A-H	A	3.85	4.80	縦	2.55	1.45	3.70	2.55	3.10	7.91	I	扉+積	扉	300～250年	A-H	7	
8	Bella Tumulus: Tomb A	A-BA	A	3.15	4.00	縦	2.00	0.94	1.88	2.00	3.00	6.00	Δ	積	扉	300～250年	A-BA	8	
9	Bella Tumulus: Tomb B	A-BB	A	2.78	3.33	単	—	—	—	3.00	3.50	10.50	*	*	—	3世紀初頭	A-BB	9	
10	Bella Tumulus: Tomb C	A-BC	A	*	*	単	—	—	—	2.30	2.50	5.75	*	*	—	3世紀末～2世紀初頭	A-BC	10	
11	Tomb at Tzouvara	V-Tz	V	3.91	4.30	単	—	—	—	2.90	3.00	8.70	Δ	木扉? + 積	—	2世紀	V-Tz	11	
12	Tomb at Kandyla	V-K	V	5.50	7.50	縦	4.10	2.30	9.43	4.10	3.70	15.17	K	積	扉	3世紀第3四半期半ば	V-K	12	
13	Kinch Tomb	KL-K	KL	4.53	7.18	縦	3.55	1.50	5.33	3.55	4.08	14.48	Δ	積	木扉?	300～250年	KL-K	13	
14	Tomb of Lyson and Kallikles	KL-L	KL	4.17	6.17	縦	0.87	0.83	0.72	3.05	3.92	11.96	*	偽扉	扉	3世紀末～2世紀半ば	KL-L	14	
15	Tomb of Judgement	KL-J	KL	8.87	9.13	縦	6.50	2.12	13.78	4.90	4.82	23.62	Δ / I	積	扉	325～300年	KL-J	15	
16	Tomb of 2004	KL-2004	KL	4.10	6.50	縦	3.10	1.00	3.10	3.10	3.80	11.78	I	積	木扉	*	KL-2004	16	
17	Anthemion Tomb	KL-A	KL	5.07	9.04	縦	4.08	2.00	8.16	4.07	5.10	20.76	I	積	扉	300～250年	KL-A	17	
18	Tomb I (Soteriades Tomb)	D-T1	D	4.96	6.56	縦	3.84	1.92	7.37	3.84	3.20	12.29	Δ	積	扉	*	D-T1	18	
19	Tomb II (Karvissa-Dion)	D-T2	D	2.86	3.77	単	—	—	—	2.05	2.55	5.23	E	木扉? + 積	—	*	D-T2	19	
20	Tomb III (Malathria-Dion)	D-T3	D	3.07	3.73	単	—	—	—	2.35	2.75	6.46	E	積	—	*	D-T3	20	
21	Tomb IV	D-T4	D	6.00	*	単	—	—	—	3.75	4.88	18.30	*	扉+積	—	*	D-T4	21	
22	Tomb D (Tumulus 4)	P-TD	P	6.60	10.60	縦	4.70	3.00	14.10	4.70	5.10	23.97	Δ	扉+積	扉	4世紀末	P-TD	22	
23	Tomb C (Tumulus 5)	P-TC	P	*	*	縦	3.30	2.00	6.60	3.30	3.50	11.55	I	木扉+積	扉 (材質?)	3世紀初頭	P-TC	23	
24	Tomb ST (Tumulus 10)	P-TST	P	4.80	8.50	縦	3.90	2.80	10.92	3.90	4.00	15.60	*	積	積	275～250年	P-TST	24	
25	Tomb of Yannis (Tumulus 11)	P-TY	P	6.30	10.30	縦	5.00	3.75	18.75	5.00	4.56	22.80	Δ	扉?	扉	300～290年	P-TY	25	
26	Tomb E (Tumulus 13)	P-TE	P	4.50	4.50	単	—	—	—	3.50	3.50	12.25	Δ	木扉+積	—	250～200年	P-TE	26	
27	Tomb B	P-TB	P	5.25	5.25	単	—	—	—	4.07	4.07	16.56	*	積	—	2世紀初頭	P-TB	27	
28	Tomb at the Old Maternity Clinic	Th-OMC	Th	3.24	2.22	単	—	—	—	2.51	1.50	3.77	Δ	積	—	3世紀末	Th-OMC	28	
29	Tomb at Syntirvani Square	Th-S	Th	4.09	4.55	単	—	—	—	3.20	3.20	10.24	E	積	—	300年ごろ	Th-S	29	
30	Tomb at Neapolis	Th-N	Th	4.50	3.55	1.27	—	—	—	3.55	2.60	9.23	Δ	木扉+積	—	250～200年	Th-N	30	
31	Tomb of Charilaou-Thessaloniki	Th-Ch	Th	*	*	単	—	—	—	3.14	3.23	10.14	Δ	積	—	3世紀末	Th-Ch	31	
32	Tomb at Langkada	Th-L	Th	7.22	9.50	縦	2.55	5.38	13.72	4.41	4.00	17.64	I	木扉+積	扉	4世紀末	Th-L	32	

【凡例】 Δ：ドリス柱式、I：イオニア柱式、Δ / I：ドリス・イオニア併用柱式、K：コリントス柱式、E：自由柱式、—：該当せず、*：データ不明。

表 1-b マケドニア墓基礎データ (表 1-a) 引用文献表

番号	略称	マケドニア墓基礎データ (表 1-a) 引用文献	番号
1	A-T2	Andronikos 1977; Andronikos 1984; Andronikos 1987b: 12; Gossel 1980: 263-270 (no. 41 pl. II, a); Touratsoglou 1997.	1
2	A-T3	Andronikos 1984; Drougou et al. 1994: 62-67; Gossel 1980: 270 (no. 42); Hammond 1991; Touratsoglou 1997.	2
3	A-T4	Andronikos 1987b: 15-16; Drougou et al. 1994: 44-47; Kottaridi 1996: 84.	3
4	A-R	Andronikos 1984: 31; Gossel 1980: 251-259 (no. 39, pl. II, b); Hammond 1991: 72; Kottaridi 1996: 84; Pantermalis 1972; Romaos 1951.	4
5	A-E	Andronikos 1987a: 81-82; Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: 60; Hammond 1991: 70-71; Kottaridi 1996: 84; Touratsoglou 1997: 245.	5
6	A-Hall	Drougou 1987: 90-91; Drougou 2005; Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: 64; Kottaridi 1996: 84.	6
7	A-H	Gossel 1980: 204-209 (no. 26, pl. II, b); Hammond 1991: 71; Kottaridi 1996: 84; Touratsoglou 1997: 247.	7
8	A-BA	Drougou 1995-2000: 232; Touratsoglou 1997: 248-249.	8
9	A-BB	Touratsoglou 1997: 249.	9
10	A-BC	Touratsoglou 1997: 249.	10
11	V-Tz	Allamani 1981: 322-323, pl. 216b; Allamani-Souri 1991; Psarra 2004; Tzanavari 1984: 260, pl. 132b.	11
12	V-K	Psarra 2004.	12
13	KL-K	Gossel 1980: 170-178 (no. 19); Miller 1993: 109-110 (catalog no. 18A); Romiopoulou 1997: 36-38; Romiopoulou and Touratsoglou 1971.	13
14	KL-L	Gossel 1980: 178-189 (no. 20); Miller 1993; Romiopoulou 1997: 39-44; Touratsoglou 1997: 207-208.	14
15	KL-J	Gossel 1980: 157-169 (no. 18, pl. III, c); Miller 1993: 110 (catalog no. 18c); Petsas 1966; Romiopoulou 1997: 24-29.	15
16	KL-2004	Lilimbaki-Akamati and Trochidis 2004.	16
17	KL-A	Miller 1993: 110-111 (catalog no. 18F); Romiopoulou 1973; Romiopoulou 1997: 30-35.	17
18	D-T1	Gossel 1980: 111-125 (no. 8, pl. III, a); Pantermalis 1985; Sotiriadis 1930; Sotiriadis 1932.	18
19	D-T2	Gossel 1980: 125-131 (no. 9); Makaronas 1955.	19
20	D-T3	Gossel 1980: 131-134 (no. 10); Makaronas 1956.	20
21	D-T4	Pantermalis 1985.	21
22	P-TD	Chrysostomou P 1987: 148-149; Chrysostomou P 1994: 56-60; Chrysostomou P 1995: 146-148.	22
23	P-TC	Chrysostomou P 1987: 148-149; Chrysostomou 1994: 53-56; Chrysostomou P 1995: 145-146.	23
24	P-TST	Chrysostomou P 1995: 148-151; Chrysostomou P 1996b; Chrysostomou P 1997a.	24
25	P-TY	Chrysostomou P 1993; Chrysostomou P 1997.	25
26	P-TE	Chrysostomou P 1994: 60-63; Chrysostomou P 1997: 222-223; Chrysostomou P 1998a: 337-338.	26
27	P-TB	Chrysostomou P 1992; Chrysostomou P 1998b.	27
28	Th-OMC	Gossel 1980: 234-239; Sismanidis 1985: 40-44.	28
29	Th-S	Sismanidis 1985: 38-40.	29
30	Th-N	Sismanidis 1985: 46-48.	30
31	Th-Ch	Sismanidis 1985: 44.	31
32	Th-L	Sismanidis 1985: 49-54.	32

扉 (d1)、の6通りが存在する。ここにおいても、前者ほど経済的かつ省力化傾向にあるといえる。

上記 1)～4) の項目について分析した結果、柱式間における相異と特徴的な各傾向は以下の通りに看取された。

1) 地域 (表 2-a)

ドリス式は今回取り上げた全ての都市群に存在し、特に旧王都アイガイであったとされるヴェルギナ (A) 及び新王都ペラ (P)、王国末期の主要都市テッサロニキ (Th) にて数が多い。一方、イオニア式は古くから政治的に主要な都市のみに存在し、特にマケドニアの中でも由緒ある古都市ミエザであったとされるコパノス・レフカディア、旧王都ヴェルギナに数があることは看過できない。自由式 (E) はディオーン (D) やテッサロニキ (Th) に見られ、前者は宗教都市、後者は王国の新都市であり、大都市に存在しないことから考えて主流から外れた印象があるが、理由は定かでない。

2) 構造 (表 2-b)

ドリス式は単複両方が存在し、イオニア式は複室のみが存在する。自由式 (E) は単室のみである。

3) 総面積 (図 4)

埋葬主体部の内部総面積と外郭形 (幅／奥行) の関係を表した分布図に正面柱式を反映させれば、ドリス式 (Δ) は広狭一様であり、イオニア式 (I) は中規模からやや大きな規模のものに限られていることがわかる。ドリス・イオニア併用式 (Δ / I) とコリントス式 (K) は各 1 例ずつしかないが、自由式 (E) とは一線を画しているように見える。

既述のように、内部総面積と外郭形の相関分布図に現われた 2 群を捉えれば、比較的大規模のア群と小規模のイ群と認識され、ドリス式とイオニア式は各群に分散しているが、ドリス・イオニア併用式はア群、コリントス式は両群の中間に位置し、自由式はイ群に位置する。

4) 閉塞法 (表 2-c)

構造を問わずに埋葬主体部正面の開口部の閉塞方法と正面柱式との相関をみれば、ドリス式 (Δ) とイオニア式 (I) は同じように分布していることがわかる (表 2-c、右下)。他の柱式をみれば、積み石閉塞 (a)、木扉＋積み石閉塞 (b) のみが見られ、経済的かつ省力化傾向の閉塞方法に偏っている。

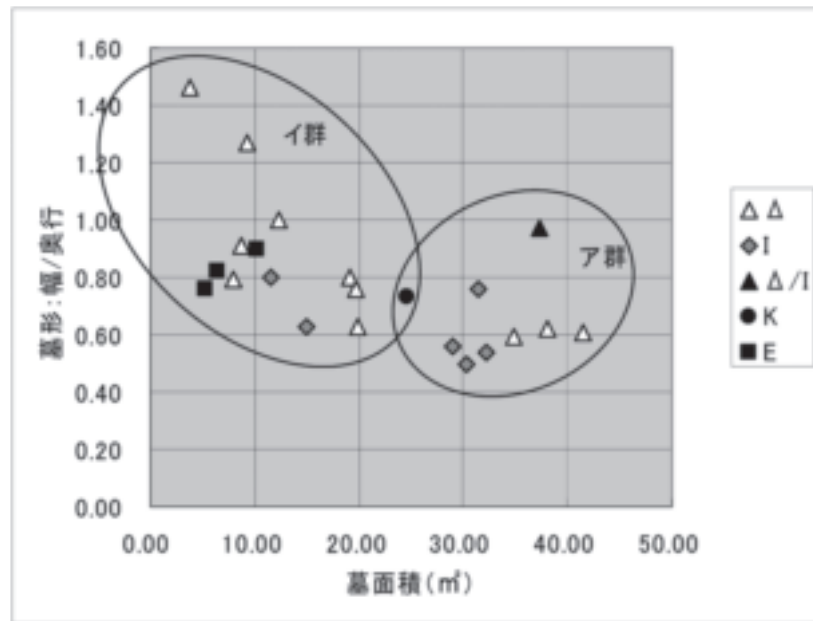


図4 正面柱式と墓面積・墓形の相関

表 2-a 正面柱式と地域の相関

	A	V	KL	P	D	Th
Δ	4	1	1	3	1	3
I	3		2	1		1
Δ /I			1			
K		1				
E					2	1
*	3		1	2	1	

表 2-b 正面柱式と構造の相関

	単	複
Δ	5	8
I		7
Δ /I		1
K		1
E	3	
*	4	3

表 2-c 正面柱式と閉塞方法の相関
(左上: 単室のみ、左下: 複室のみ、右下: 構造を問わず全て)

	a	b	c	d	*
Δ	2	3	1	1	3
E	2	1		2	1
*	1			1	2

【凡例】

Δ: ドリス式

I: イオニア式

Δ / I: ドリス・イオニア併用式

K: コリントス式

E: 自由式

*: 不明

閉塞方法

a. 積み石閉塞

a1. 積・積

a2. 積・木扉

a3. 積・扉

b. 木扉+積

b1. (木扉+積)・扉

c. 扉

c1. 扉・扉

d. 扉+積

d1. (扉+積)・扉

	a1	a2	a3	b1	c1	d1	*
Δ		1	2		3	1	1
I		1	2	2	1	1	
Δ /I			1				
K			1				
*	1				(1)		1

	a	b	c	d	*
Δ	5	3	3	1	1
I	3	2	1	1	1
Δ /I	1				
K	1				
E	2	1			
*	2		(1)	1	3

複室構造をもつ墓の正面開口部で積み石閉塞のみだったものが障壁開口部でどのような閉塞方法をしているか、を知る必要があると考え、更に単室と複室とを分けて閉塞方法を調べた(表2-c、左)。その結果、正面開口部が積み石のみである複室構造の墓の殆どが、障壁部開口部は扉(a3)あるいは木扉(a2)で閉塞されていた。したがって、正面開口部が単なる積み石閉塞であっても、複室構造をもつ墓は主室の入り口である障壁開口部がより手厚く保護してあることがわかる。

B. マケドニア古代都市における柱式の分布

上述のマケドニア墓埋葬主体部正面の柱式分布と比較するために、古代マケドニアの主要都市遺跡において出土した建築遺構に付随した柱頭をカウントし、柱式の分布を調べた(表3)。分析対象は、時間的には、古代マケドニア王国の主な存続期間である古拙期と古典期、ヘレニズム期に属する建築遺構であり、空間的には、上述の分析で取り上げた中央および西マケドニアに位置する都市遺跡に含まれるものとする。ただし、ヴェリアについては、出土例がなく、除外した。

各都市遺跡で出土した建築遺構においてみられる各柱頭について、数がわかるものについては割合を出し、それ以外は判明している柱式のみを結果として示している。なお、コリントス式と自由式については明確な出土例は報告書に記載されていなかったため、ドリス式およびイオニア式についてのみ検討した。

まず、分布地域に関して、マケドニア墓における柱式分布とはほぼ重なる結果が見られた。つまり、ドリス式のみ存在するのがディオン、ドリスおよびイオニア両柱式の存在が認められるのがヴェルギナとコパノス・レフカディアである。ただしイオニア式のみがみられるテッサロニキは、資料数が少なく現時点ではあまり意味があるとはいえない。

次に、各遺跡において柱頭の出土した具体的建築遺構をみれば、ドリス式は王宮や神殿をはじめとした多くの建築遺構において出土しており、イオニア式は、貴族の邸宅や、王族・貴族の子弟の教育機関であった哲学者アリストテレスの学校、公共機関の公文書を扱う部署などの、南ギリシアや小アジアからの文化的影響を受けた部分に限定されて使用されていたことがわかる。旧王都であったヴェルギナの王宮でも僅かにその使用が認められる。

IV. 考察：マケドニア墓における正面柱式の意味について

以上の分析結果は、マケドニア墓においてドリス柱式が王族以下広く一般に使用されていた一方、イオニア柱式は貴族などの社会的・経済的上部階層により、恐らく顕著な

外来的影響の下に使用されていたことを示す²⁰⁾。

空間的分布に関しては、墓と都市一般建築の双方において、ドリス柱式とイオニア柱式の地域分布がほぼ一致するという結果を得ている。つまり、ドリスおよびイオニア両柱式は旧王都アイガイであったといわれるヴェルギナ、由緒ある古都市ミエザであったといわれるコパノス・レフカディア、新王都ペラ、新しい大都市であったテッサロニキに存在している。一方、ドリス柱式のみが存在した都市は、ディオンである²¹⁾。

そして全体としていえるのは、数の上でのドリス柱式の圧倒的優位である。墓と都市のいずれの分析においてもドリス柱式の割合は際立って多い。この結果は、明らかに古代マケドニア人らが本柱式を好んで採用した理由が存在することを示す。

この理由について、筆者は本柱式がマケドニア民族自体と何らかの関係を持っていたことを示しているのではないかと考える。その有力な根拠として、古代マケドニア人が自らをギリシア民族の一派のドリス系であると信じ、ドリス系の英雄であるヘラクレスを一族の祖として崇めていた、という古文獻の記述²²⁾、そして傍証として、マケドニア王家ゆかりの遺跡や遺物にヘラクレスやその象徴が表わされた例が多く見受けられるという事実²³⁾が提示される。更に、古代マケドニア人がドリス系であったということが史実か否かという問題は別にして、古典期のマケドニア王家が当時の国際社会へ踏み出すために自らの出自がギリシア系の英雄に遡る家系であるということを喧伝したとの説²⁴⁾もあり、これも筆者の本考察を裏付ける。

そしてこのように考えた場合、ディオンにドリス柱式のみ存在するという事実も、同都市が古代マケドニア王国の祭祀を司った聖都市であり、王族の祖であるドリス系を象徴した本柱式を採用していたとして理解されよう。

ドリス・イオニア併用柱式とコリントス柱式、自由柱式については、資料数が少ないため解釈し難いが、少なくとも、構造と規模、閉塞方法の結果から、自由柱式とその他2柱式の間には明確な線が引かれ得る。自由柱式は何らかの理由で質素に造営されているとの特徴がある。ドリス・イオニア併用柱式はコパノス・レフカディアに位置するマケドニア墓に採用されており、都市部では同じくコパノス・レフカディアとペラのアゴラの文書局でみられる²⁵⁾。墓における採用理由は現時点では不明である。

V. 結語

本研究において、マケドニア墓ではドリス柱式がマケドニア民族の象徴として広く使われていたという結論に達した。一方、イオニア柱式については傾向を捉えたものの、更なる分析が必要である。その他の柱式については資料数

表3 古代マケドニア都市遺跡の建築遺構における柱式の分布表 (2007 年現在)

都市	建築複合体	建物	具体箇所	時期 (紀元前)	柱式 (柱頭数)	割合 (%)	引用文献
ヴェルギナ	王宮	主体部	正面	4 世紀 第 3 四半期	Δ (18)	Δ : 93.97 I : 6.03	Andronikos 1984: 39-44; Touratsoglou 1997: 217-220; Velenis 1997: 25-27.
			正面裏		I (2)		
			中庭		Δ (6)		
			饗宴前室 入り口		I (3)		
	エフクリア 神殿	三室柱廊型 建物	柱廊	4 世紀	Δ (3)	Δ	Drougou 1995-2000: 247-255; Drougou and Saatsoglou- Paliadeli 1999: 28-31; Saatsoglou-Paliadeli 1994: 109-116; 1996.
		大型社殿	正面		不明 (2)		
		柱廊型建物 I	柱廊		不明 (21)		
コパノス・ レフカディア	アブラ	公文書局	柱廊	4 世紀後半	Δ [1F], I [2F]	Δ, I	Allamani and Misailidou 1992; Allamani and Koukouvou 1995; 1998.
	アリストテレス 学校	柱廊型建物	柱廊	350 年頃	I	I	Petsas 1968; Romiopoulou 1997: 12-15; Siganidou and Trochidis 1990.
ディオオン	ゼウス神殿	*	*	ヘレニズム期	Δ	Δ	Kremydi-Sisilianou 2000: 367; Pantermalis 1973: 338-342; 1989: 12-14; 1995: 169; 1996: 205; 1997: 29-30.
	デメテル神殿	社殿	正面	4 世紀末	Δ (2)	Δ : 100	Pantermalis 1973: 335-336; 1989: 14-17; 1997: 17-22; 2002: 422; Pinyatoglou 1990; 1991; 1992; 1996; 2001.
		社殿	正面	4 世紀末	Δ (2)		
	ディオニュソス 神殿	*	*	*	Δ	Δ	Pantermalis 1973: 331-333; Touratsoglou 1997: 257
ペラ	王宮	建物 I・II	正面		Δ	Δ	Chrysostomou P 1996a; 1999: 491-492
			中庭		Δ (44)		
			中庭		Δ (14)		
		建物 III (下部、柱廊型建物)		297-276 年	Δ		Chrysostomou P 1996a; 1999: 491-495
	アブラ	—	南側	4 世紀後半～ 1 世紀初頭	Δ		Akamatis 1989; 1990-1993; 1994-1999; 1997; 1999.
			文書室		Δ [1F], I [2F]		
	邸宅	「ディオニュソス」 邸	中庭	4 世紀 第 4 四半期	I (20)	Δ : 67.74 I : 32.26	Makaronas and Youri 1989
		「エレニ」邸	中庭	4 世紀 第 4 四半期	Δ (28)		Makaronas and Youri 1989
		「漆喰」邸			Δ (14)		Siganidou and Lilimbaki - Akamati 1997: 34-36
テッサロニキ	古拙期神殿				I (2)	I : 100	Tasia et al. 2000

【凡例】 Δ : ドリス式、I : イオニア式、— : なし、* : 不明

の少なさもあり、今後の分析には工夫が不可欠である。

いずれにせよ、マケドニア墓の埋葬主体部の正面柱式の選択と採用には、一面のみでは捉えられない様々な要因があると考えられる。そもそも一般の古代ギリシア建築における正面柱式の選択と採用について、その理由や法則性は明らかにされていない。各柱式が発達した地域が異なるということのみである。ただし、古代マケドニアに関していえば、各柱式はすべて外来であるため、それらを如何に受容して建築物に応用したかという問題であり、南ギリシアと比してその柱式選択にはより明確な意味があると推察できる。そしてこの問題は、既に述べたように古代マケドニア社会の上部階層の構造解明と関わると考えられ、また一方で古代マケドニアと南ギリシア、小アジアとの外交関係も示唆する可能性もある。

また、今回は時間的な分布をみることが叶わなかったが、

今後、墓編年が完成すれば、柱式の時間的分布が明らかになり、より明確な分析結果が得られると期待される。

したがって、今後は墓の時間軸の設定を急務として、その一方で今回の分析の対象地域を広げ、また柱式の相違が反映されている建築要素を丹念に観察する必要がある。また、別の角度からの分析として、マケドニア王が南ギリシアの聖地に奉納した奉献建築物の類について柱式の傾向を確認することも考えている。また、今回は一般の都市建築における柱式の選択と墓における正面柱式の選択が同様の基盤において実行されるとの前提があったが、この前提についても十分に検討する必要があると考える。

凡例

- 1) 原語の転写と語句 : 名詞に関して以下の留意点を示す。なお、ギリシア語に関しては慣用化しているもののみを古典語読みで、研究上の用語や研究者名及び地名などは現代語読みとした。

【固有名詞】慣用語はカタカナのみで記した。それ以外に関し、研究上の用語、人名、地名についてはカタカナに転記しその後の()内に原語をラテンアルファベットで記した。ただし、脚注内で原語がギリシア語の場合にはギリシア語アルファベットを使用している。なお、人名には、必要に応じて存命あるいは在位期間を記した。

【一般名詞】適宜邦訳し、場合によってはカタカナに転記し()内あるいは注釈に原語と若干の説明を加えた。

- 2) 文献：ギリシア語文献についてはラテンアルファベットによる略語を付した。

註

- 1) 「マケドニア (Macedonia)」という語の原義は古代マケドニア王国であり、その最盛期の領域はバルカン半島の中央部を占め、現代においては、ギリシア共和国、ブルガリア共和国、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国、アルバニア共和国に跨る。この広域マケドニアのおよそ65%を占めるギリシアの北部、マケドニア地方には、王国の中心地としての重要な都市遺跡が集中している。本稿では、このギリシア領マケドニアを「マケドニア」として扱う。
 - 2) アーチを奥行き方向に連続させた構造体をアーチ形天井とすれば、マケドニア墓の天井はアーチよりも頂部弧高がやや低い傾向があり、ここでは特徴を想像しやすくするために、「蒲葺形天井」と呼ぶ。
 - 3) これらの名称（「建造式室形墓」および「岩削式室形墓」）は、当地の研究者が慣例的に使用してきたものを字義通りに訳した。筆者の見解によれば、これらの名称は古代マケドニアの墓葬形態すべてを俯瞰した場合の特徴的把握がなされていないため、考古学的に正確な名称とは言い難い。各墓葬形態の名称を明確に定義するためには、古代マケドニア王国存続期間に存在した全ての墓についての体系的な分類が必要となる。筆者が手がけた分類によれば、前者の「建造式室形墓」は名称として妥当であると判断されたが、「岩削式室形墓」は「横穴式室形墓」（あるいは「洞室墓」）と名付けられうる。これについては稿を改めたい。
- なお、この「岩削式室形墓」は、丘陵斜面の軟質の岩盤を削って室形の空洞を穿ったもので (Kurtz and Boardman 1994)、多くは墓道を持つ。ミュケナイ期に始まり、古代を通じて地中海全域に分布した。マケドニアにおいては、前4世紀後半に出現し、前2世紀後半まで盛行した (Lilimbaki-Akamati 1994: 94)。ヴェリア (Βέρεια)、ペラ (Πέλλα)、エデッサ (Εδέσσα)、アンフィポリス (Αμφίπολις) などに多く分布しており、西マケドニアにも少数分布している。1987年時点で111基が確認されたが (Lilimbaki-Akamati 1994: 92)、その後も出土数が着実に増加しているとみられ、2008年に筆者が確認したところでは、少なくとも128基を数える。
- 4) 現在のところ、楕円形が一例みられる (Tomb of Yannitsa, Tumulus 11: 表 1-a 番号 25)。
 - 5) 被葬者が誰かという問題については未だ確定せず、現在も論争中であるが、公式上はフィリッポスⅡ世となっている。註13参照。
 - 6) マケドニア墓の初の集成は、同墓の定義を行ったパンデルマリスが行った (Pantermalis 1972)。その後ヴェルギナの大地丘の下における王墓の発見 (1977年) を経て、1979年までに発見・調査された43基のマケドニア墓を集成した B. ゴセル (Gossel) の報告 (Gossel 1980) が発表され、1993年には S. ミラー (Miller) の報告が行われている (Miller 1993)。
 - 7) 最も信頼に足る建築要素は蒲葺形天井であると考えられ、墓埋

葬主体部の高さ天井を形作る半円の半径が描く円の最下端との関係により時期が判明するという説が提示されていた。これによれば、半円の最下端が床に接する位置を起点として時間の経過に従い、半円の最下端が上昇するというものである。この説は、1970年代に Ph. ペツアス (Petsas) とパンデルマリスにより否定され (Petsas 1966: 46; Pantermalis 1972: 176)、ヴェルギナの王墓の発見と被葬者に関する同定に従い、完全に破棄された。その後も柱頭などの建築要素を取り上げた型式学的分析が試みられた。

- 8) 例えば、古代マケドニアの陶器には、マケドニア在地陶器、アッティカ (アテナイ) やコリントスなどからの輸入陶器、その模倣陶器、の3種類があり、そのうち輸入陶器が年代決定の指標となるが、それを正確に機能させるのは困難が伴う。まず3種類の陶器は区別し難く、また一方でアテナイのアグラやケラメイコスにおいてなされた編年軸を使う際も製作と使用の時間差を考慮すべきであり (Misailidou-Despotidou 1999)、その扱いは古代マケドニアの研究者の各々に委ねられているようであり、統一した方法は確立されていないと見受けられる。
- 9) これについては、Miller 1993 に詳しい (Miller 1993: 101)。アーチ形関連建築法の外来説については、まずヴェルギナの王墓の発見後の1970年代末に、アレクサンドロスの東征の際に中東から技術を取り入れたとの論が提示された (Tomlinson 1977: 285-289; Boyd 1978)。この説は、19世紀末に始まる伝播論の影響が根底にあり、ギリシア考古学に携わる考古学者の伝統的な態度に基づいた見解であった (Andronikos 1987b: 4-5)。この外来説の立場において、T. D. ボイド (Boyd) は、ギリシア本土で確認されている最も古いアーチ形及び蒲葺形建築物をヘレニズム期初期 (前4世紀後半) の一群として捉え、遺構のいずれもアレクサンドロス大王の後継者 (Διαδοχοι) と関連があることを確認し、アレクサンドロスの軍事技術者がメソポタミアから導入した技術であるとした (Boyd 1978)。これに対して、マケドニア独自の建築技術であるとする自生説が、1980年代に展開された (Andronikos 1984; 1987)。この説の主な論者である M. アンドロニコス (Andronikos) は、蒲葺形屋根はマケドニア墓を建築する際の技術上の必要から生まれた工夫の一つであるとした (Andronikos 1987: 8) そして、ヴェルギナの王墓の発見以降あらたに発見されたマケドニア墓を論拠として、平屋根と湾曲屋根 (pitched version) を含んだ試行錯誤の応用を繰り返しながら蒲葺形屋根が主室を覆う形で定着した、と主張した (Andronikos 1987b)。一方、はじめは外来説に拠っていた R. A. トムリンソン (Tomlinson) は後に自生説に転じた (Tomlinson 1987: 305-312)。
- 10) 註3同様、字義通りに訳せば「方形土壙墓」である。トムリンソンは特にヴェルギナの同墓について述べている。
- 11) 註3同様、字義通りに訳せば「箱形墓」である。しかしながら、筆者の手がけた分類においては、前註に示した墓と同様のカテゴリーに入り、より大型化したものと推定される。
- 12) マケドニア墓やトラキアの室墓にみられる寝台と饗宴用具一式は、側臥や仰臥状態で饗宴にのぞむベルシア様式が伝えられた結果であると考えられ、ベルシアの侵略時に持ち込まれたスタイルであるという推察がなされている (Tomlinson 1970)。
- 13) ヴェルギナのマケドニア墓Ⅱ (Great tumulus, Tomb II: 表 1-a 番号 1) の被葬者が誰かという議論である。主に、フィリッポスⅡ世か、あるいはフィリッポスⅢ世アリダイオス (Αρριδαίος-Φίλιππος Γ'): 在位紀元前323-317年) か、という論争が行なわれ、未だ決着がついていない。前者であると主張するのはアンドロニコスら発掘に関わったギリシア人考古学者らと若干数の外国人研究者で、ギリシア政府はこれを公式見解として採用し博物館等の記

述もそのように統一している (Borza 1990: 260; 周藤・澤田 2004: 147-150)。その一方で、E. N. ボルツァ (Borza) などこれに懐疑的な研究者も多い。特にアリダイオスを推す P. W. レーマン (Lehmann) を始めとした外国人研究者と若干数のギリシア人研究者の見解は依然として有力である (e.g. Lehmann 1980; 1982)。論点は主として、壁画や副葬品等の年代や古文獻の記述 (アレクサンドロス三世の武具の描写、葬送の様子など) との整合性であるが、遺骨自体を鑑定した報告もあり、近年では、A. バルツィオカス (Bartsiokas) が、遺骨鑑定によりフィリッポス二世のものとする説 (Prag et al. 1984) に対して、再鑑定を行なうことで異を唱えている (Bartsiokas 2000)。

- 14) 現在のヴェルギナの地が古都アイガイであったという N. G. L. ハモンドの説が公表されたのが 1968 年であり、その後 1977 年以降アンドロニコスの発掘調査により徐々に考古学的な実証がなされることとなった (Borza 1990: 287-288)。この説は現在まで支配的ではあるが、その一方で、若干数の研究者がこれに異を唱えており (e.g. Faklaris 1994)、未だ論争が続いている。
- 15) 時間的分布については、筆者による墓葬形態の分類・編年が未完成のため、ここでは触れない。
- 16) 墓分析においては、墓構造のみならず、遺物などの考古資料も対象とする必要がある。しかし、本分析対象であるマケドニア墓の殆どが盗掘や破損を受けており、被葬者や副葬品について情報が欠落しているため、遺物を対象とした分析の遂行には様々な困難が伴う。現在、筆者の行なっている墓葬形態の分類・編年の一環として遺物の分析も試行中であり、この分析と結果報告は次の機会に譲る。
- 17) 計測的属性は、3) 総面積、のみである。
- 18) 各都市遺跡のヴェルギナからの直線距離は次の通り。ヴェリア約 10.5km、コパノス・レフカディア約 21km、ペラ 34km、ディオオン 35.5km、テッサロニキ 55km。
- 19) 扉は石製であり、大理石製が殆どであるため、単に「扉」と記す。木製の場合は「木製扉」と明記。
- 20) マケドニア墓に関する分析では、対象が当時の社会における階層のあるいは経済的上部に限られ、一般庶民は含まれないことは言うまでもない。
- 21) ヴェリアについては、都市遺跡から柱頭の出土が確認されていない。
- 22) ヘロドトス (5.22.1)、トゥキュディデス (2.99.3 及び 5.80.2)、イソクラテス (5.32 及び 105-12) 等がある (Hammond 1989: 45)。特に、古代マケドニア人の出自に言及した建国神話については、ヘロドトス (8.137~139) に始まり、ローマ時代の史料に至るまで様々な形で語り継がれた (澤田 2006: 24)。これについて、古代マケドニアがギリシア系であるということが史実か否かという論争があり、史実とするハモンドに対し、フィクションとみなすボルツァが異を唱えている (澤田 2006: 24-26; Hammond 1972: 432-433; Borza 1990: 80-84; 1999: 5-6)。
- 23) ヴェルギナの遺跡からは、ヘラクレスにまつわる碑文や遺物が多く出土している。例えば、王宮の中庭に面したトロスでは“父祖ヘラクレス (Ο Πατρώος Ηρακλής)”と刻まれた碑文が発見され (Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: 20)、マケドニア墓Ⅱ (Great tumulus, Tomb II: 表 1-a 番号 1) からヘラクレスの浮き彫りが施された銀製アンフォラやヘラクレスの棍棒の浮き彫りが施された盾などが出土している。これらマケドニア王家との結びつきの深いヘラクレス関連の遺物については、澤田 2006: 28-29 に詳しい。
- 24) 澤田 2006 参照。
- 25) 建物の 1 階にドリス柱式、2 階にイオニア柱式が飾られ、マケド

ニア墓でも同様である。

参考文献

- Akamatis 1989: Ακαμάτης, I. M. 1992 Η αγορά της Πέλλας κατά το 1989. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 3 (1989): 75-90.
- Akamatis 1990-1993: Ακαμάτης, I. M. 1995 Αγορά Πέλλας 1990-1993. *Εγνατία* 4 (1993-1994): 231-247.
- Akamatis 1994-1999: Ακαμάτης, I. M. 2001 Αγορά Πέλλας 1994-1999. *Εγνατία* 5 (1995-2000): 257-281.
- Akamatis 1997: Ακαμάτης, I. M. 1999 Αγορά Πέλλας 1997. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 11 (1997): 205-213.
- Akamatis 1999: Ακαμάτης, I. M. 1999 Αγορά Πέλλας: 15 χρόνια αρχαιολογικής έρευνας. *Αρχαία Μακεδονία* VI: 23-43.
- Allamani 1981: Αλλαμανή, B. 1988 *Αρχαιολογικών Δεκτίον* 36, 1981 Χρον. B2: 322-325.
- Allamani-Souri 1991: Αλλαμανή-Σουρή, B. 1991 ΒΑ νεκροταφείο αρχαίας Βέροιας, μακεδονικός τάφος οικοπέδου Τζουβάρα. Στο *Ελληνιστική κεραμική από τη Μακεδονία*, Θεσσαλονίκη, Αριστοτέλειο Πανεπιστήμιο της Θεσσαλονίκης: 70-79.
- Allamani and Koukounou 1995: Αλλαμανή, B. - A. Κουκουνού 1998 Μιέζα 1995: Ανασκαφικές έρευνες. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 9 (1995): 79-94.
- Allamani and Koukounou 1998: Αλλαμανή, B. - A. Κουκουνού 2000 Μιέζα. Ανασκαφικές έρευνες. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 12 (1998): 371-381.
- Allamani and Misailidou 1992: Αλλαμανή, B. - B. Μισαηλίδου 1995 Ανασκαφικές έρευνες στην αρχαία Μιέζα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 6 (1992): 203-215.
- Andronikos 1977: Ανδρόνικος, M. 1977 Οι βασιλικοί τάφοι της Μεγάλης Τούμπας. *Αρχαιολογικά Ανάλεκτα εξ Αθηνών* X (1977): 1-72, εικ. 1-31.
- Andronikos 1984: Ανδρόνικος, M. 1984 *Βεργίνα-οι βασιλικοί τάφοι και οι άλλες αρχαιότητες*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.
- Andronikos 1987a: Ανδρόνικος, M. 1988 Βεργίνα. Ανασκαφή 1987. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 1 (1987): 81-88.
- Andronikos 1987b: Andronikos, M. 1987 Some Reflections on the Macedonian Tombs. *Annual of the British School at Athens* 82: 1-16.
- Bartsiokas, A. 2000 The Eye Injury of King Philip II and the Skeletal Evidence from the Royal Tomb II at Vergina. *Science* 21 April 2000 vol. 288 no. 5465: 511-514.
- Biers, W. R. 1996 *The Archaeology of Greece*. New York, Cornell University Press.
- Boyd, Th. 1978 The Arch and the Vault in Greek Architecture. *American Journal of Archaeology* 82: 83-100.
- Borza, E. N. 1990 *In the Shadow of Olympus: The Emergence of Macedonia*. Princeton, Princeton University Press.
- Borza, E. N. 1999 *Before Alexander: Constructing Early Macedonia*. Claremont, Calif: Regina Books.
- Chrysostomou P 1992: Χρυσοστόμου, Π. 1995 Ο μακεδονικός τάφος Β' της Πέλλας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 6 (1992): 137-146.
- Chrysostomou P 1993: Χρυσοστόμου, Π. 1997 Μακεδονικός τάφος Γιαννιτσών. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 7 (1993): 123-134.
- Chrysostomou P 1994: Χρυσοστόμου, Π. 1994 Ανασκαφικές έρευνες στους Τύμβους της Πέλλας, κατά το 1994. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 8 (1994): 53-72.
- Chrysostomou P 1995: Χρυσοστόμου, Π. 1998 Ανασκαφικές έρευνες στους

- Τύμβους της Πέλλας, κατά το 1995. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 9 (1995): 143-154.
- Chrysostomou P 1996a: Χρυσοστόμου, Π. 1997 Το ανάκτορο Πέλλας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^α (1996): 105-142.
- Chrysostomou P 1996b: Χρυσοστόμου, Π. 1996 Ο μακεδονικός τάφος ΣΤ' με τις σαρκοφάγους της Πέλλας. *Αρχαία Μακεδονία* IV, τόμος 1: 281-306.
- Chrysostomou P 1997: Χρυσοστόμου, Π. 1999 Ανασκαφικές έρευνες στην Πελλαία χώρα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 11 (1997): 216-232.
- Chrysostomou P 1998a: Χρυσοστόμου, Π. 2000 Τύμβοι Πέλλας 1998. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 12 (1998): 337-351.
- Chrysostomou P 1998b: Χρυσοστόμου, Π. 1998 *Μακεδονικοί τάφοι Πέλλας, I. Τάφος Β', ο ασύλητος*. Θεσσαλονίκη.
- Chrysostomou P 1999: Χρυσοστόμου, Π. 2001 Ανάκτορο Πέλλας και Πελλαία χώρα κατά το 1999. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 13 (1998): 491-505.
- Drougou 1987: Δρούγου, Στ. 1988 Νέος μακεδονικός τάφος με ιωνική πρόσοψη στη Βεργίνα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 1 (1987): 89-100.
- Drougou 1995-2000: Δρούγου, Στ. 2001 Βεργίνα - οι τάφοι Heuzey. Νέες ανασκαφικές έρευνες. *Εγνατία* 5 (1995-2000): 227-246.
- Drougou 2005: Δρούγου, Στ. 2007 Βεργίνα 2005. Νέο φως στην παλιά ανασκαφική έρευνα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 19 (2005): 475-482
- Drougou et al. 1994: Δρούγου, Στ. - Χρ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη - Π. Φάκλαρης 1994 *Βεργίνα, η μεγάλη τούμπα - Αρχαιολογικός Οδηγός*. Θεσσαλονίκη, Αριστοτέλειο Πανεπιστήμιο Θεσσαλονίκης.
- Drougou and Saatsoglou-Paliadeli 1999: Δρούγου, Στ. και Χρ. Σαατσόγλου-Παλιαδέλη 1999 *Βεργίνα-περιδιαβάζοντας τον αρχαιολογικό χώρο*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Faklaris, P. B. 1994 Aegae: Determining the Site of the First Capital of the Macedonians. *American Journal of Archaeology* 98: 609-616.
- Ginouves 1993: Ginouves, R. H. 1993 *Μακεδονία από τον Φίλιππο Β έως τη Ρωμαϊκή κατάκτηση*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.
- Gossel, B. 1980 *Makedonische Kammergräber*. Berlin, Monath's KopieDruck.
- Hammond, N. G. L. 1972 *A History of Macedonia I: Historical Geography and Prehistory*. Oxford, Clarendon Press: Oxford University Press.
- Hammond 1989: Hammond, N. G. L. 1999 *Το μακεδονικό κράτος - Γένεση, θεσμοί και ιστορία*. Αθήνα, Εκδόσεις Παπαζηση. (原版 Hammond, N. G. L. 1989 *The Macedonian State: origins, institutions, and history*. Oxford, Clarendon Press: Oxford University Press.)
- Hammond, N. G. L. 1991 Royal Tombs at Vergina: Evolution and Identities. *Annual of the British School at Athens* 86: 69-82.
- Kottaridi 1996: Κοτταρίδη, Α. 1997 Βεργίνα 1997. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^α (1996): 79-92.
- Kremydi-Sisilianou 2000: Κρεμύδη-Σισιλιάνου, Σ. 2000 Ένας νομισματικός θησαυρός από το ιερό του Διός στο Δίον. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 14 (2002): 367-376.
- Kurtz, D. and J. Boardman 1994 *Έθνη ταφής στον αρχαίο ελληνικό κόσμο*. Αθήνα, Ινστιτούτο του βιβλίου Μ. Καρδαμίτσα.
- Lehmann, P. W. 1980 The So-Called Tomb of Philip II: A Different Interpretation. *American Journal of Archaeology* 84: 527-531.
- Lehmann, P. W. 1981 Once again the Royal Tomb at Vergina. *Αρχαιολογικά Ανάλεκτα εἰς Αθηνών* 14: 134-144.
- Lehmann, P. W. 1982 The So-Called Tomb of Philip II: an Addendum. *American Journal of Archaeology* 86: 437-442.
- Lilimbaki-Akamati 1994: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη Μ. 1994 *Λαξευτοί θαλαμωτοί τάφοι της Πέλλας*. Αθήνα, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Lilimbaki-Akamati and Trochidis 2004: Λιλιμπάκη-Ακαμάτη, Μ. και Κ. Τροχήδης 2004 Νέος μακεδονικός τάφος στα Λευκάδια Ημαθίας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 18 (2005): 465-484.
- Makaronas 1955: Μακαρόνας, Χ. 1955 Ανασκαφή μακεδονικού τάφου εις καρύττας Πιερίας. *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας* 1955: 151-159.
- Makaronas 1956: Μακαρόνας, Χ. Ανασκαφική έρευνα μακεδονικού τάφου εν Δίω Πιερίας. *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας* 1956: 131-138.
- Makaronas and Youri 1989: Μακαρόνας, Χ. — Ε. Γιούρη 1989 *Οι οικίες της αρπαγής της Ελένης και του Διονύσου της Πέλλας*. Αθήνα, Αρχαιολογική Εταιρεία.
- Mastrapas 1994: Μαστραπάς Αντ. Ν. 1994 *Ελληνική αρχιτεκτονική — από τους προϊμους ιστορικούς χρόνους μέχρι τη ρωμαιοκρατία*. Αθήνα, Ινστιτούτο του βιβλίου - Μ. Καρδαμίτσα.
- Miller, S. 1993 *The Tomb of Lyson and Kalikles*. Mainz am Rhein, Philipp von Zabern.
- Misailidou-Despotidou 1999: Μισαηλίδου-Δεσποτιδου, Β. 1999. Χρονολογικά στοιχεία από ταφικά σύνολα του 4^{ου} αι. π.Χ. από τη Ν. Φιλαδέλφειο. *Αρχαία Μακεδονία* VI: 771-785.
- Müller — Wiener, W. 1995 *Η Αρχιτεκτονική στην Αρχαία Ελλάδα*. Θεσσαλονίκη, University studio press.
- Pantermalis 1972: Παντερμαλής, Δ. 1972 Ο νέος μακεδονικός τάφος της Βεργίνας. *Μακεδονικά* 12: 147-182.
- Pantermalis 1973: Παντερμαλής, Δ. 1977 Λατρίες και ιερά του Δίου. *Αρχαία Μακεδονία* 2 (1973): 331-342.
- Pantermalis 1985: Παντερμαλής, Δ. 1985 Οι μακεδονικοί τάφοι της Πιερίας. *Οι αρχαιολόγοι μιλούν για την Πιερία, 28-29 Ιουλίου και 4-5 Αυγούστου 1984*. Θεσσαλονίκη: 9-13.
- Pantermalis 1989: Παντερμαλής, Δ. 1989 Δίον. *ΑΡΧΑΙΟΛΟΓΙΑ* 33: 6-53.
- Pantermalis 1995: Παντερμαλής, Δ. 1998 Ανασκαφή Δίου 1995. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 9 (1998): 167-172.
- Pantermalis 1996: Παντερμαλής, Δ. 1997 Δίον - Η δεκαετία των ανασκαφών 1987-1997. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^α (1996): 205-214.
- Pantermalis 1997: Παντερμαλής, Δ. 1997 *Δίον: αρχαιολογικός χώρος και μουσεία*. Αθήνα, Αδαμ.
- Pantermalis 2002: Παντερμαλής, Δ. 2004 Δίον 2002. Η αγορά και άλλα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 16 (2002): 417-426.
- Petsas 1966: Πέτσας, Φ. 1966 *Ο τάφος των Λευκαδίων*. Εν Αθήναις, Αρχαιολογική Εταιρεία.
- Petsas 1968: Πέτσας, Φ. Μ. 1968 Ανασκαφή Νάουσσης. *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας* 1968: 65-71.
- Pinyatoglou 1990: Πινγιάτογλου, Σ. 1993 Το ιερό της Δήμητρας στο Δίον. Ανασκαφή 1990. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 4 (1990): 205-215.
- Pinyatoglou 1991: Πινγιάτογλου, Σ. 1994 Το ιερό της Δήμητρας στο Δίον. Ανασκαφή 1991. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 5 (1991): 145-156.
- Pinyatoglou 1992: Πινγιάτογλου, Σ. 1995 Το ιερό της Δήμητρας στο Δίον. Ανασκαφή 1992. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 6 (1992): 223-233.
- Pinyatoglou 1996: Πινγιάτογλου, Σ. 1997 Το ιερό της Δήμητρας στο Δίον. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^α (1996): 225-232.

- Pinyatoglou 2001: Πινγάτογλου, Σ. 2003 Το ιερό της Δήμητρας στο Δίον. Ανασκαφή 1998-2001. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 15 (2001): 355-362.
- Prag, A. J. N. W., J. H. Musgrave and R. A. H. Neave 1984 The Skull from Tomb II at Vergina: King Philip II of Macedon. *Journal of Hellenic Studies* 104: 60-78, pls. II-VII.
- Psarra 2004: Ψαρρά, Ε. 2006 Ένας νέος μακεδονικός τάφος στη Βέροια. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 18 (2004): 495-508.
- Romaios 1951: Ρωμαίος, Κ. Α. 1951 Ο μακεδονικός τάφος της Βεργίνας. Αθήναι, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών.
- Romiopoulou 1973: Ρωμιοπούλου, Κ. Α. 1973 A New Monumental Chamber Tomb with Paintings of the Hellenistic Period near Lefkadia (West Macedonia). *Αρχαιολογικά Ανάλεκτα εξ Αθηνών* 6: 87-92.
- Romiopoulou 1997: Ρωμιοπούλου, Κ. 1997 Λευκάδια-αρχαία Μιέζα. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Romiopoulou and Touratsoglou 1971: Ρωμιοπούλου, Κ. και Ι. Τουράτσογλου 1971 Ο μακεδονικός τάφος της Νάουστας (τάφος του Kinch). *Αρχαιολογική Εφημερίς* 1971: 146-164.
- Saatsoglou-Paliadeli 1994: Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χρ. 1998. Βεργίνα 1994. Ανασκαφή στο Ιερό της Εύκλειας. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 8 (1994): 109-117.
- Saatsoglou-Paliadeli 1996: Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χρ. 1997. Το ιερό της Εύκλειας στη Βεργίνα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 10^Α (1996): 55-68.
- Saatsoglou-Paliadeli 1995-2000: Σαατσόγλου-Παλιαδέλη, Χρ. 2001. Το ιερό της Εύκλειας στη Βεργίνα, Σύντομη επισκόπηση των ανασκαφών αποτελεσμάτων στην αγορά των Αιγών. *Εγνατία* 5 (1995-2000): 55-68.
- Siganidou and Lilimbaki-Akamati 1997: Σιγανίδου, Μ. - Μ. Λιλιμπάκη-Ακαμάτη 1997 *Πέλλα: πρωτεύουσα των Μακεδόνων*. Αθήνα, Υπουργείο Πολιτισμού, Ταμείο Αρχαιολογικών Πόρων και Απαλλοτριώσεων.
- Siganidou and Trochidis 1990: Σιγανίδου, Μ. - Κ. Τροχίδης 1993 Η σχολή του Αριστοτέλους στη Μιέζα. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 4 (1990): 121-125.
- Sismanidis 1985: Σισμανίδης, Κ. 1985 Μακεδονικοί τάφοι στην πόλη της Θεσσαλονίκης. *Θεσσαλονίκη* 1: 35-70.
- Sotiriadis 1930: Σωτηριάδης, Γ. 1930 Ανασκαφαί Δίου Μακεδονίας. *Πρακτικά της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας* 1930: 36-51.
- Sotiriadis 1932: Σωτηριάδης, Γ. 1932 Ανασκαφαί εν Δίω. Ο καμαρωτός τάφος. *Επιστημονική Επετηρίς Φιλοσοφικής Σχολής του Αριστοτελείου πανεπιστημίου Θεσσαλονίκης* 2: 5-19.
- Tasia et al. 2002: Τασιά, Α. - Ζ. Λόλα - Ο. Πελέκτης 2002 Θεσσαλονίκη - ο υστεροαρχαϊκός ναός. *Το Αρχαιολογικό Έργο στη Μακεδονία και Θράκη* 14 (2000): 227-246.
- Thomas, D. H. 1989 *Archaeology*. Fort Worth: Holt, Rinehart and Winston.
- Tomlinson, R. A. 1970. Ancient Macedonian Symposia. *Αρχαία Μακεδονία* V: 308-315.
- Tomlinson, R. 1977. Vaulting Techniques of the Makedonian Tombs. *Αρχαία Μακεδονία* II: 285-289.
- Tomlinson, R. A. 1987. The Architectural Context of the Macedonian Vaulted Tomb. *Annual of the British School at Athens* 82: 305-312.
- Touratsoglou 1997: Τουράτσογλου, Ι. 1997 *Μακεδονία. Ιστορία - Μνημεία - Μουσεία*. Αθήνα, Εκδοτική Αθηνών.
- Tzanavari 1984: Τζαναβάρη, Κ. 1984 Αρχαιολογικόν Δεκτίον 39: 260.
- Velenis 1997: Βελένης, Γ. 1997. Τεχνικές στο ανάκτορο της Βεργίνας. Στο *Μνήμη Μανόλη Ανδρονίκου (Τιμητικός τόμος)*. Θεσσαλονίκη, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών.
- 周藤芳幸・澤田典子 2004『古代ギリシャ遺跡辞典』東京堂出版。
- 澤田典子 2006「古代マケドニア王国の建国伝説をめぐって」『古代文化』58巻3号 23-40頁。
- 松尾登史子 2008「マケドニア考古学の成立と展開」『西アジア考古学』9号 171-182頁。

松尾 登史子

九州共立大学

Toshiko MATSUO

Kyushu Kyoritsu University